



No. 45 [平成27年2月13日]
岡山県総合教育センター
〒716-1241
加賀郡吉備中央町吉川7545-11
TEL(代) (0866)56-9101
(特別支援教育部)(0866)56-9106
(特別支援教育部相談専用電話)
TEL (0866)56-9117
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

特別支援学校の授業について思うこと

今年度の当センターにおける研修講座や調査研究、県内の特別支援学校への訪問等を通じて、特別支援学校の授業について、講師や受講者、各学校の教職員の方々の考えや思いを聞いたり、実際に授業参観したりする機会を多くいただきました。そうした経験から、特別支援学校の授業について思うことを書き留めてみたいと思います。

「目標設定ができれば授業はできる」

今年度の当センター研修講座や学校現場等で「目標設定ができれば授業はできる」という言葉をいろいろな方から聞きました。この言葉は、教師が授業の目標（意図）を明確にもっていれば、それを基に授業の内容や方法を考えられ、良い授業ができるということを意味しています。逆にいえば、目標（意図）が明確にもてなければ、良い授業をすることは難しいということです。この言葉は、特別支援学校の授業づくりにおいて目標設定がいかに重要なことであるかを表しています。

授業に関わる目標は、いくつかのレベルで設定されます。例えば、学習指導要領で示されている各教科等の目標、年間指導計画での目標、単元（題材）計画での目標、日々の授業での目標などです。学習指導案をみても、必ず単元（題材）目標、本時の目標が設定されています。このことは、小・中学校等の学習指導案でも同じですが、特別支援学校のものには、単元（題材）と本時の両方又はいずれかにその学習集団全体とともに個別の目標が記述されています。このことは「個への対応」を基本とする特別支援学校ならではの欠くことのできない特徴です。付け加えれば、個別の目標に合わせて、個別の実態を記述していることも特徴的であり、特別支援学校の学習指導案の独自性といえます。

また、知的障害特別支援学校の教育においては、学習指導要領に示された各教科の内容を基にして、個々の児童生徒の状態等に即した具体的な指導内容を設定することが学習指導要領に示されています。これは、小・中学校のように、学年ごとに各教科で指導する内容が決まっているのとは違って、知的障害教育に携わる教師にはできることです。ただし、その分、

教師には指導内容を吟味し、適切な具体的な指導内容を設定することが求められます。そのため、指導内容を考えるときの基となる指導目標が適切である必要があります。

このように、特別支援学校の授業づくりにおいては、授業に関わる目標をいろいろなレベルで考えるとともに、目標を適切に設定することが重要であることは、誰もが認めることだと思いますが、実際に目標設定をするとすると、そんなに簡単なことではないということも事実です。「目標設定ができれば授業はできる」というのは、そのことを暗に言い表している言葉でもあります。

今年度も、特別支援学校の様々な学習指導案を見せていただきました。時間をかけ、校内で検討して出来上がった学習指導案で、授業者の思いが込められたものであり、授業者の思いをしっかりと理解しようと読ませていただくと、中には、単元（題材）と本時の目標が全く同じ記述であったり、全体（集団）の目標と個別の目標のつながりが少し見えにくかったりするものもありました。また、この単元（題材）又は本時の授業だけでは、達成することが難しいだろうと思われる目標が設定されていたり、評価をどのようにするのが分かりにくい目標を設定しているものもありました。

授業の目標設定に当たっては、その授業に対する授業者の意図を筋道（論理）が通ったものにまとめ、記述することが大切であると考えます。今では、どの特別支援学校も、個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成しています。それらの計画における目標は、当然ながら授業の目標と関連して初めて意味があるといえます。学習指導案を作成するときに設定する目標について、年間計画、単元計画、個別の教育支援計画、個別の指導計画の目標を一枚の紙に並べて書き出し、比べてみると、それらのつながりがはっきりと見えてくると思います。授業者自身がそれを見て、筋道が通ってれば良いですし、もしも筋の通らないところがあれば、その授業の目標に関して、どこかに無理なところがあることに気付くのではないのでしょうか。

太田正己氏は、著書「普段着でできる授業研究のすすめ―授業批評入門」（1994年、明治図書）の中で「授業の改善とは、授業の目標の適切さとそれを達成するための方法の妥当性を高めるということである」と述べています。適切な目標設定をすることを大切にしたい授業づくりを進めたいですね。

子どもの事実を踏まえた授業改善

特別支援学校の授業では、「個への対応」が適切になされることが求められます。そのため、子ども一人一人を個性の異なる唯一の存在として、一般的、平均的なものの見方でなく、「その子」の実態を的確に捉えることが必要です。

これは、研修講座の中で聞いた、ある授業の実践報告の話です。その実践内容は素晴らしいもので、授業の構想から実践、評価までを複数の授業者がチームワークよく毎時間しっか

り検討しながら、対象とする子どもたちの実態に対応した授業実践が行われていました。しかし、その報告の中で一つ気になることがありました。その授業には、子どもが一人ずつ順番にみんなの前に出て、黒板に貼られた問題に答えるという学習活動がありました。いすに座っている他の子どもたちには、前に出た子どもの活動を見やすくし、学習の見通しを持って取り組むための配慮もなされていました。その授業は校内研究として行われたのですが、参観した教員から、黒板に貼ったカードが指名されて前に出てきた子どもの頭よりも高い位置に貼られていたことについて、子どもの目の高さに合わせた位置に貼るべきではないかという指摘がされたそうです。その授業者も、「その通りだ」と考え、次の授業からは黒板に貼るカードの位置を子どもの目の高さにしたいという話でした。

この話についてどう思われるでしょうか。カードを見えやすくするために、子どもの目の高さに貼るように配慮することは当たり前ではないかと考えられるでしょうか。一般論で言えば、それは正しいでしょう。しかし、この話には、特別支援学校の授業としてはどうかというところがあります。それは、黒板に貼るカードの位置について、それを見ている子どもにとって、どうだったのかという子どもの立場に立った検討がされていないということです。ある子どもには、目の高さに貼られることでカードが見やすくなったかもしれません。しかし、他の子には、それまでの授業で行っていたように自分より少し高い位置に貼られたカードの方が見やすかったかもしれません。要するに、教師（大人）の立場や思いだけで、手立てを変えることは、必ずしも適切とはいえないことがあるのです。授業者は、授業における子ども一人一人が示す行動や表情などに十分注意を払い、そこに見られた子ども一人一人の事実を踏まえて、授業を改善することが大切になると考えます。特別支援学校の授業の基本として「子どもから出発する」ということを再確認したいと思います。

「個への対応」が徹底された授業とは

特別支援学校の授業の特徴は、その対象とする子どもたちが同じ学年（生活年齢）であっても、個々の実態差が大きく、特性による違いもあるため、「個への対応」を徹底することにあるといえます。それは、同一の指導目標、指導内容、指導方法による一斉指導ではなく、子ども一人一人に応じた指導目標、指導内容、指導方法を用意し、個別指導を行うということです。ここでいう個別指導は、教師と子どもがマンツーマンで行うような授業のこのみを指すのではなく、複数の子どもの集団を対象とする授業においても個に応じた指導を行うということです。ただし、集団を対象に授業を行う場合には、集団で学習することの良さを生かす指導も同時に求められます。それは、授業において対象とする子ども（＝学習者）がよりよく主体的に学ぶことができるようにするためです。

今年度当センターが実施した研修講座の一つに「小・中学校通常の学級における特別支援教育研修講座」がありました。その講師として招いた大正大学専任講師の川俣智路先生が

「特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり」というテーマで講義されました。その講義で、川俣先生は「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」のお話をされましたが、その中で、子ども一人一人にはそれぞれに得意な学び方があり、各自が自分に適した方法を選択できると、主体的な学びにつながりやすい。そのために、教師の側は、子ども一人一人の多様な学び方に柔軟に対応できるようにすることが大切ではないかというお話をされました。

そして、授業について「バイキング料理か、和定食か」という問い方で、いろいろなメニューが用意された料理の中から、それぞれの子どもが好きな（自分に合った）料理を好きな量だけ選び、それぞれの方法で食事ができる「バイキング料理」のような授業をするのか、全員が同じメニューの料理を同じ量だけ同じ方法で食べる「和定食」のような授業するのか、どちらが子どもの主体的な学びにつながるかを考えてみてはどうかと問いかけられました。

この川俣先生のお話は、通常の学級における授業を念頭に置いてされたことですが、特別支援学校の授業においても、示唆的なお話だと思います。すべての授業を「バイキング料理」のような授業にすることは大変で、必ずしも適当ではないかもしれませんが、個々の子どもに指導目標、指導内容、指導方法が異なり、「個別の対応」を徹底しようとする特別支援学校の授業では、「バイキング料理」のような授業を用意することが必要ではないかと思えます。

ちなみに「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」では、教師が学習者に対して行う三原則として、次のことを挙げています。

- I 提示に関する多様な方法の提供
 - ・ 認知のためのオプション
 - ・ 言語と記号のためのオプション
 - ・ 理解のためのオプション
- II 行動と表出に関する多様な方法の提供
 - ・ 身体動作のためのオプション
 - ・ 表出スキルや流暢さに関するオプション
 - ・ 実行機能のためのオプション
- III 取り組みに関する多様な方法の提供
 - ・ 興味の引き方のオプション
 - ・ 努力や頑張りを継続させるためのオプション
 - ・ 自己調整のためのオプション

※「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」についての詳しい情報を知りたい方は、次のウェブサイト、Facebookをご覧ください。

☆<http://www.andante-nishiogi.com/udl/>

☆<https://ja-jp.facebook.com/udljapanese>

（特別支援教育部 林 栄昭）